＜活用に向けた課題やガイド養成等＞
事務局（嘉手納）：ガイドは質がそろっていないとまずい、という事は伊平屋村の公認などを出しているのですか。

上江洲室長：まだそこまではいっていないです。ただ、様々な方が来て概ね３、４名の方がガイドをします。あとは民泊を受け入れているのが 22 民家さんがいますが、この方たちがめいめい子供を受け入れた際に集落を散策させますが、ある程度歴史とか史実の中にあってデフォルメしたりスポイルしたりするというのは語り手の資質とかいうのもありますが、基本のものがないと子供たちを 30 名から 40 名受け入れをする中で５から６の民家で言っている事が全然違っていたら、子供たちが集まった時、自分たちを受け入れしてくれたお父さんの所ではこう話していたよと食い違いがある問題が今出てきています。受け入れる人数が多くなればなるほどそういった問題が今後出てくると思います。ある程度のガイドラインがここで集約されたら、民家さんやガイドの方に村としてこんな話の基本ストーリーがありますと言える。それがあって私はこう思います、というのはありですけど全然違う事を説明したら困ります。そういったもので（歴史文化基本構想）使いたいととても思います。

當眞先生：まさにそれを作っているんです。文化財カルテを 100 枚以上 1000 枚近く作っています。このカルテというのは行政としては次の職員にも引き継がれていって、カルテですから人間のものと同じでこの時点までこういうふうにあったけれども 10 年後は変わっている可能性があるので、それもみんな記入できるものがカルテで、それを今作っています。このカルテが基になります。
　島外から教育委員会や役場にきて、こういう事を調べたいというのであればカルテをコピーしてあげて、これ以上は学者先生方の見解ですから、「何年時点ではこういうカルテがあります」とあげればいいと思います。基礎資料を今作っていますから、非常に良いのではないかと思います。

伊礼副村長：これは有効だと思いますね。室長から出たのは総合推進室では今、観光交流産業を基本として進めていますが、そのプログラムを作る際にも今日の話などは有効だろうと思います。これまで、独自で調べてやるというのはなかなか時間と努力が要りますから、そういった点では統一した見解の基に共通情報を、いつも教育委員会と連携するようにというのはそういう意味です。今、カルテを作っているという話ですから、これから統一した基準になるかと思います。
　現在いろんな事業で、三村連携などいろいろ増えているのですが、そこでも歴史的な所で一方は進んで独自で調べていたりしますが、齟齬がふえてしまったりというのがあります。歴史認識の基にできていないような状況があるという事ですから、その辺をどんどん意見を出して頂ければというふうに思います。

西藤：こういった調査に実際に同行して思うのは、すごい宝があるという事です。これが今までバラバラであったのは何故だろうと逆に思うのです。これがつながればすばらしい伊平屋というものを表現できると思います。ガイドなどのお話が出ていましたが、全体を説明できる人だけでなくていいと思います。賀陽山であればそこを任せろ、と任せて安心という人を作れば、必ず来た人がすべてを回るわけではないし、すべてに興味があるわけでもないですから、そういった事（ポイントを絞って精通している）も１つは必要と思います。もちろん全体をガイドできる人が多ければいいですが、それはなかなか難しいものがあるかと思いますので、広く浅く案内できる人と狭く深く案内できる、の２つに考え方を分けて人材を育てるのがいいと私自身は感じています。広く浅くても海の事、あるいは山の事が案内できるという人も必要だし、我喜屋なら我喜屋の集落の歴史をしっかりと語れる人がいれば、また素晴らしいと思います。今こういう仕事に関わって特に痛感しています。

伊礼副村長：ありがとうございました。指摘の点はその通りだと思います。人が減っていく中で、そういう人材を作っていくのは大変だろうという気がしておりますが、まめに調査していただいてありがとうございます。

名嘉課長：検討委員会であるか実行委員会であるか、その持ちようを担当の嘉手納さん任せになっていた部分もあって、主管課としてもう一度見直しする手もあるのですが、今回嘉手納さんを中心に前回の悉皆調査から実際に今は歴史文化基本構想に入ってくるのですか、伊平屋の個別にあった宝を１つのまとまりとして見ていこうと

いう点で、いろんな意見を共有する部分で行政の主管課の主なる人たちに今回集まって頂きました。今回、共通の意識をもって物事を考える場の機会になったのはすごく良く、初めての事ではないかと思います。今後、教育委員会から上がる部分と総合推進の観光部門から上がる部分もあると思います。それから建設部から上がる部分と、エリアを考えて言った時に植物部門では農林水産との関わりも出てくると思いますので、どこかから出てきた問題を皆で共通部分で１つの構想の中に活かせる形で持っていけたらと思います。

今日２点ほど興味を持ったものは、伊平屋の歴史を知るという事で地質のものに興味がありました。チャートの方で建設課とのいろんな意見があったので、情報としては嘉手納さんは先輩たちの持っている知識を拾い集めて伝えて、広がりを持たせるように考えていくというのはどうでしょうか。熱水鉱床なども出てきましたので、ジオパークとの関連で興味を持ちました。

もう１つは、私は我喜屋の出身なのですが上里グスクからあの場所を見てもらった時に、昔お年寄りと一緒に行った拝所、御願所の場所があります。トオグ時代、エン時代なんですけれども、持って行った場所、この地形図あったら「ああ、ここだね。他界した人もいるけれどもその人といった場所だね。」と見られる。その場所をもう１回、歴史と関連したもので共有していけたら、とすごく実感してわかりましたので、私たちの年代ではなくて先輩たちの関わりのものも取り上げたらもっと古い歴史が見えてくると思いました。貴重な機会ではありましたが、１度２度ではなくもう少しグループワークできる形で、今回はこの主なる検討委員会でしたが、先ほど言ったように団体をもう少し増やしたらどうかという事で、グループワークみたいにワークショップをもう少し増やして意見交換ができたらいいと思いました。

伊礼副村長：先に確認しておきましょう。伊平屋村歴史文化基本構想策定業務は平成27、28年の２カ年間の事業計画です。その中でグループワークが有効じゃないかという名嘉課長のお話しですから、その辺はMUI景画さんの意見も聞きながら検討してみてはどうでしょうか。

それも含めて職員研修の中でいろいろやりたいので、嘉手納さんに頑張っていただく事になる。やはり足元からやらないといけないという前々からの話で予定はしています。そういう機会を利用して、まとめながらやって頂ければと思っていますので、準備方よろしくお願いします。

最後に、當眞先生に、悉皆調査からずっと関わって頂いております。何か我々に欠けている地域のアイデンティティーといいますか、その言葉の説明と全体的な伊平屋村歴史文化基本構想がどんなイメージになっていくか、その辺を含めてお話しいただけますでしょうか。

當眞先生：今までの課長さん方がいろいろご意見出された事はごもっともだと思います。特に上江洲室長の伊平屋検定、計画されているか詳しくわかりませんが非常に大事な事です。最近はそういう検定を受けて自分が高まっていくという方もいらっしゃるし、そういうような事をやると今度は伊平屋にたくさんの人が集まって観光客もいらっしゃるようになる。話に齟齬（そご）がしょっちゅう出ていたら非常に困るわけです。この辺りで学問のきちんとした考え方になるわけですが、これは民話で、民話の世界と事実の世界を混同したらややこしくなります。さらに追い打ちをかけるように、右か左かというような風潮が最近はありますので、決着を付けなさいという話には持っていかないで民話は民話の世界とする。民話には隣の民話と同じモチーフにしながら違いがあるんです。違いがあるのが民話だと教えないといけないわけです。そのためにはガイド、人材育成です。西藤さんもおっしゃっていましたが、人材をどう作るか。私はやはり民間任せでは良くないんじゃないかと思います。今後、観光客や入域者が増えれば、勝手にガイドしてくれとやると苦情は行政に来ると思います。ある程度村としても、どこがやるかは別としてガイドを養成していくシステムを作っていく必要があるだろうと思います。そうする中で勉強して人材を育成して、お年寄りの方々は定年して手持ち無沙汰の方もいらっしゃいますから、勉強して高まって自分たちは伝えていくというのを組織的にやる必要はあると思います。

そういう素材を作りましょうという事でその１つがカルテです。カルテは作られました。そして報告書も一応は前段階のものは出ましたので、それを一般に普及していく。最終的には地域ごとに、安里課長がおっしゃっていましたが野甫に飛行場ができる。そこを玄関口にして入ってきますから、もちろん飛行場を造る時にはいろい

ろな開発が行われます。そうすると昔の姿が見えなくなる。その前に地域ごとのストーリーを作って、基本構想で人が来た時にもどんどん広がっていくようにという事をおっしゃっていましたので、そういうものも頭に入れて地域を定めていく。どのように地域ごとのストーリーを作っていくかはこれからですので、皆さんの知恵をうんと反映させた方がいいとおもいます。

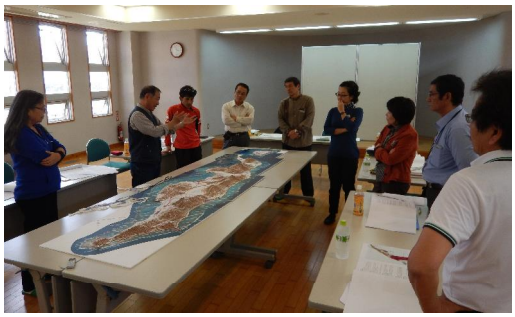
委員長のおっしゃっているアイデンティティーというのは、自分たちは伊平屋に生まれている誇りですよね。これがアイデンティティーを形成すると思います。例えば私は當眞といいます。當眞は第一尚氏の子孫だという事を、タンメー、スーからしょっちゅう言われて、屋蔵大主の話も小さい頃から聞かされているんです。これで自慢するわけじゃないが、なんとなく親近感が出てくる。伊平屋に生まれた皆さんは成長すると島外にどんどん出ていくと、伊平屋のアイデンティティー、伊平屋はどういうものだったかを学校教育でも教えるし、家でも自然に教えられるわけです。そうすると、我々が今作業した地域ごとのものを皆が体得していけばアイデンティティーにつながっていくわけです。今はバラバラなんです。だから、点から線、面として今後文化財を活かしていきましょうというのがこの事業です。その基礎的な資料を作りましょうというのがこの事業だと思います。以上です。

伊礼副村長：何か見えてきたような感じがします。我々が弱かった、誇りを持てないとか地域を語れないとかいうものがこれまではネックでした。その解決の１つとして、というよりこれをやらないと地域のアイデンティティーの解決にはできないだろうと思います。人材育成の面からも国際人を育てると謳っていますが、世界には自分の事や歴史文化を語れない人は相手にされないというのはよく言われている話です。その面からもこの事業は非常に大切なことだと思いますので、我々はそういう意味も含めて先生方のお力を借りて仕上げていきたいと思います。

今日は本当にありがとうございました。

伊平屋村歴史文化基本構想策定業務　第２回策定委員会

日　時　平成28年３月７日（月）
出席者　伊礼清委員長（副村長）
當眞嗣一委員
東恩納吉一教育長
安里建設課長、野甫農林課長、上江洲推進室長、名嘉教育課長
嘉手納知子、西藤優三（伊平屋村歴史民俗資料館）
山口洋子、山口一樹、新里栄太（(有)MUI 景画）



進行：名嘉教育課長

委員長挨拶：伊礼清副村長

事務局（嘉手納）：伊平屋村の歴史文化基本構想に取り組む意義について説明

MUI 景画 山口：歴史文化基本構想のため実際にやってきた事について説明

＜琉球の統一国家と伊平屋＞
當眞先生：人間がまだ誕生していないという地形・地質の上に現在の我々がいるわけです。その後に人間が来るわけですが、ひと昔前までは南から来たのではないかとか、独自に出てきたのではないかなどの説がいろいろあったのですが、北の方から縄文人が来たというのははっきりしていました。もちろん旧石器時代は別として、新しい時代になると人々が真っ先に北から伊平屋に入り、そこからまた更に南の方に広がっていくわけです。そういう事を考えると古い時代、そして更に新しい時代の鎌倉時代とか室町時代はどうなるかというと、やはり北からの文化の流れが来るから、真っ先に伊平屋にとりついてくるわけです。そういう意味では、伊平屋というのは地質も非常に古いものを残しているけれども、歴史文化としても古いものから徐々に発展をしていっている姿が見て取れるという事で、私たちからすれば、この小さな島でありながらコンパクトに沖縄の歴史がすべて揃っている。同時にもっと新しい時代になると、人間は集団を作って切磋琢磨しながら１つの国家を作っていきます。琉球の場合に一番特徴的なのは、琉球王国という統一国家を作ったというのが大事な話になります。統一国家を作ることによって、同じ文化や言語が共通していく。そうすると伊平屋は北からの文化の流れがあるのですから、統一国家を作るひとつの先駆けができ上がってきて、その痕跡がグスクとして残っています。そして次第にこれが南下して、北の方では北山という小さい国家ができ、そして中山ができ、南山ができるという話になっていきます。古い時代から新しい時代にかけて連綿と伊平屋の歴史がこの小さい島に立っているという事が言えます。それは、ただ言えるだけではなくて物が残っているのです。
近世になると今度は土地利用の話が出てきますので、土地利用の痕跡もここでちゃんと記録として残る。これがハル石とかそういったものにつながっていくのではないかと考えられます。

東恩納教育長：北というのは大陸を示すのですか。

當眞先生：大和の方です。

東恩納教育長：縄文人というのは学術的には南から？

當眞先生：これは最近はっきりしてきました。琉球の最初の土器文化というのは北からの流れで、旧石器が最近見つかっていろいろ話題になっています。もちろん北だけではなくて、琉球全体が伊平屋だけではなくて中国、南の影響も入ってきてミックスされるわけですが、大きな根元の流れは北からの流れというのははっきりしています。

MUI 景画 山口：説明

＜腰岳や賀陽山のグスク＞
當眞先生：今回の歴史文化基本構想は、このすばらしい伊平屋をどのように料理するかです。伊是名は尚円王で売り出しているが、伊平屋はそれどころではなく、まだいろいろあります。尚巴志とも結びつくし、いろんなものと結びつく。こういう宝ものを利用しない手はないでしょう。

東恩納教育長：石積みは構造的に賀陽グスクや腰岳と田名が似ているのですか？

當眞先生：ぜんぜん違います。賀陽グスクはどちらかといえば韓国とかにあるようなもので、甕門（オウジョウ）、かぎ状の門があったりする。南部に糸数城など２ヶ所ぐらいあって、南部は韓国や朝鮮と関係が深いのではないかと見ています。しかしこれは解決するにはあと 40～50 年かかるはずです。これらのグスクなどを含めて尚巴志と結びつけて話を膨らませて良いと思います。
　一方、田名グスクの反対側の登る道にも、人を登らせないような工夫がしてあり、今回もまた現地を見るつもりです。

安里課長：石を供給するために北側から途中まで運んできたのではないかという話を２代ぐらい先輩たちから聞いていました。

當眞先生：腰岳の山頂部はこれとはちょっと違うのです。腰岳は明らかに自分たちが逃げる場所です。どこから逃げるのかわかりませんが、逃げてここから敵が来たら迎撃する、という発想です。だからここに住んで地域住民の行政をする役場のようなものではない。なぜこういう所まで逃げ込まないといけなかったのかというのを考える必要があります。賀陽グスクはちゃんと門があって、ある程度基地にしてある。そして登れる場所には結界を作ってある。尾根筋から必ず山には登りますが、登れないように途中で結界を作っている。それだけここは重要基地なのです。どういうものかと言いますと、これから登ってくるものを腰曲輪群で迎撃する。ここは1､2ヶ所で止めている。
　わざわざ海に向かっている、これは何なのかというと、当時外洋船が航海する時に彼らと密接にこのグスクは結びついていると私は思う。ここからは私の構想ですが、倭寇の貿易船、琉球王朝で那覇の港に中国の皇帝の使者たちがやってきて貿易していたという話ですが、その以前は民間貿易です。中国船といっても中国人だけ乗っているのではなくて朝鮮人も日本人も乗っている。そして帆船ですから長い航路はできない、水や薪も補給しないといけない。そうすると彼らはいろんな品物を積んでいて、だいたい焼物で、チャイナと言いますが、この外洋船が通るものをキャッチするためのものではないかと私は見ています。なぜかというと、ここにいるとみんなキャッチできるからです。では、なぜキャッチするのかというと、こんな小さな島で自分たちが使うための高価な焼物を手に入れるためではなく、外洋船は有力な按司のいる所に行きたいが様子がわからないので、その水先案内人をする事でものすごい利益がある。またこんな小さな島で生きるより世界を股にかけたいという人も必ず出てくるから、彼らの仲間になって貿易をやったというのもあったのではないか。このグスクはそういうふうに私は理解します。しかし、この腰岳グスクは理解できないです。彼らがここに留まってやったのか、何なのか。皆さんがロマンとしていろいろ語り合っていく事が、この歴史文化基本構想で大事です。今までは田名グスク１

つを指定して、これを整備して使いましょうということだったんですが、文化財や文化遺産をみんなセットにしてパッケージにしてやると、いろんな角度からアクセスできるということです。こういう構想を作るけれどもそれを教育委員会がみんなＰＲするという話ではなくて各部局がこれを最大限に使ってやる。ロマンが本当に満ち満ちています。

MUI 景画 山口：イーサト、屋蔵大主の話について説明

＜上里遺跡の解明＞
當眞先生：上里遺跡と呼ばれる駐車場周辺について、作業スタッフと一緒に最近現地調査をしたんです。イーサト（上里）といっている所は駐車場で壊されていると我々は認識していたのですが、この前入ってみたら、図面にも書かれていますがちゃんとした造成がなされていて、そこに登らせないような工夫をしているというのがわかりました。恐らくこの駐車場を発掘すると当時のものがたくさん出てくる可能性があります。今までには久里原貝塚を掘りましたね。久里原貝塚は学術利用するために発掘したのではなく、土地改良をするから壊されるので、文化財保護法で調査をしないといけないという法律があるので文化庁が補助金を出してやっているのです。上里遺跡などは恐らく学術調査をして宝ものにしたいという場合は補助金は出ないから、村で単独でやる以外ないです。やったら相当遺物などが出る可能性があると思います。

東恩納教育長：ゾーンをくくる場合、島ひとつをくくった方が手っ取り早いような気がします。ゾーンに分けた場合はゾーンの中で目玉を作るというわけですか。

當眞先生：パッケージにすることによって物語性を持たせようという事です。その辺はみなさんが議論をしてやるものでしょうね。島に住んでいる人が一番どうやれば物語が発展していくのか、どのようなゾーンにすればテーマがわかりやすくなるのかという事です。

東恩納教育長：私はそれは壮大なるロマンになるかなと思ったりします。具体性のある物語を作るというのだったら、この部分で、これから発展として島全体を見つめていくというのはいいと思います。

伊礼副村長：将来の展開から考えれば元々は集落も独立していると考えて、その方がいいと思います。

當眞先生：南城市の場合は例えばアガリウマーイ（東御廻り）の拝む場所を固めていたりする。あちらとこちらではちょっと違うかもしれない。あちらはユマジリ（四間切り）が合併しているから。
　今のようなゾーンを作るパッケージもいいし、あるいはちょっとゾーンが多すぎるのであれば少なくしてもいい。

名嘉教育課長：具体的な説明を受けましたので、次は関連文化財群の歴史文化保存活用エリアの検討ですが、先ほどエリアごとに分けるのか島を１つにするのかなど意見がありますが、皆さんの意見を聞いて協議してもらいたいと思います。

＜神話伝承の重要性＞
當眞先生：神話伝承もやはり大事です。クマヤーもうんと利活用する必要があります。最近は癒しを求めて、久高島なんかはすごいです。真夏でも日傘をさして若い女性たちが来たりします。神話伝承を前面に出し、クマヤーを核にした方がいいでしょうね。久葉山も神がいらっしゃるようで非常にロマンをかきたてます。いいアイディアがあればどんどん出し合って。第一尚氏関係はあれで１つまとまっていますね。尚巴志、イーザト、屋蔵大主は１つの囲いになるかもしれませんね。クマヤーは１つになるかもしれないし。自由に出されたらいいと思います。南城市でもアイディアがたくさん出されました。結局は落ち着きました。
　各集落の御嶽について当時からあったけれどもムラの人たちが「あれは報告しなくていい」というので、あがっていないのもあるかもしれないし、ここにないからといってすべて後からできたというふうにもできないです。王府時代は間切りでみんな報告させているんです。だから、コウジ（公儀）の祈願所以外にもあるんでしょう。

聖地は悉皆調査されているので、どういう物語を作ってやるかが今後の課題です。

東恩納教育長：アフリ嶽というのは特別なものですか。

當眞先生：首里城に行くと黄色い傘がありますね。ウランサンというのですが、アフリ嶽にはウランサンがあがるらしいです。ノロがあがったと報告するのです。当時は今以上に神がかりした人がたくさんいたはずですから。

東恩納教育長：この島はノロも結構多かったということですよね。田名部落で23か24ぐらいおられるんです。順番があって田名ニイヤ（根屋）の方に全部ネーミングされて貼られています。

安里課長：うちが17番目です。

當眞先生：田名ノロも、１人の人がやるわけじゃないから代々重なるんです。またヌールジーというのがまた付くから大変ですね。どの集落もノロは出ていますか？ 島尻はいないのですね。

＜歴史文化基本構想のゾーン＞
事務局（嘉手納）：今回出してもらった６つのゾーンは、琉球史がよくわかっている人や歴史や文化が好きな人にとってはアピールできるものだと思うのです。歴史などにあまり親しんでいない人を対象とする場合は、３ゾーンぐらいが良いのではないかと思います。
平地で暮らしているだけとか、山に逃げるために高いところに面倒なグスクを造ったりとか、そういった人の活動が動いていくところは、そこを１つにまとめられないかと思っているのです。例えば、貝塚時代に割と平たい所に張り付いて過ごしていて、次に稲作が普及してきて生活のスタイルが変わると、今度はグスクというものを築く時代ができる。そこから更にグスク全体を統一していく王国ができる、という認識でいいんでしょうか、當眞先生？

當眞先生：いいですよ。

事務局（嘉手納）：この３時代をひとまとめに表せるエリアといいますかストーリーができないか。この６つのゾーンはこれでとても使いやすいと思うので、別の階層と言いますか階層として３つの時代をまとめているものがあるといいのかなと思います。

東恩納教育長：歴史文化、民俗、自然も含めて学術的な視点で非常に共感を持っている人だったらこういうロマンを構築していったら、すごく楽しいだろうと思います。一方、村、島という枠組みで捉えていくと、教育委員会の立場はこれを明らかにするというのも含めて調査、整備、補修が役割です。それを活用するのは推進室など他部署の人たちです。そういう視点からの意見を出してみてください。

＜ストーリーと活用方向＞
上江洲室長：歴女とかそういった流行りもあって、歴史が好きな方のカテゴリーもいいとかと思いますが、例えばその中で地質だけとか、１本通して貝塚時代からの周遊のルートなどがあると面白いかもしれないですね。この小さい伊平屋島に牛の骨が発掘されました、というストーリーからスタートして稲作文化が入ってくる、それによって土地の取り合いがあったかもしれない、それを守るためにグスクができました、とかいうストーリーができるのでしょうか？
　先週現地トレイル 22 キロのレースをやったのですが８キロのウォーキングのレースの中にこういった説明ができる方がいればおもしろいんじゃないかとか、そういった事で島を知ってもらうのもありじゃないかと懇親会の中で意見が出ましたので、そういったカテゴリー分けがあれば、私たちとしては使いやすい。
　例えば、建設課長が話していた事で、島の人でもなかなかわからない事を掘り出して「こういったことが昔はあったよ」と聞けるのはとても勉強になるので、こういう話ができるストーリーをここでコースを作る。８キロじゃなくて10キロの中にそこが点在しているとかいう話も面白いかと思う。屋蔵大主のコースも今回近いコースが入っていた。ちょっと寄り道してここを知ってもらうというのはいいと思う。そういうカテゴリー分けをあと

１本ですね、22 キロコースですと長く走るので走る前にブリーフィングがありますが、コース説明の中でここにチャートがあり、チャートとは何ぞやという話が膨らむ、そういった話ができるエリア分けも面白いと思います。

教育委員会が調査で発掘と整理をやって頂けると、このアウトラインに沿って自分たちはメニューを作ることは今後可能性がたくさんあると思う。例えばランだけじゃなくてウォークラリーとかでもいいと思います。８キロコースで今回やりましたが、スタンプなどを置いてそこを周遊して歴史を知りながら歩くイベント、島内・島外参加型のイベントなども作りやすいようにレイアウトしていただければいいと思います。

伊礼副村長:私は、尾方先生からジオの話が出てから伊平屋島の見方がまったく変わったような感じがしました。やはり島の成り立ちから始まってやらないと、単なる上物だけ探ってもどうかと思います。ですからジオの話を入れたいと聞いた時は、大いにいい話だと思いました。やはり島の誕生から話ができるというストーリーが一番いいと思っています。前回、付加帯の話を聞いた時にそんなに貴重な話なのかと思って驚きました。

東恩納教育長：村の構想として、100 年かかるか何年かかるかわからないけれども、そういう構想をもって段階的に進めていく事は未来に向けてとても大事じゃないかと思います。

當眞先生：文化財群にしてやると、非常にいい発想が出てくることがわかります。例えば北の方は地質・地理関係に神話伝承を入れてやるようなものが出ています。これをすべてベストとするわけではないですが、一応北の方はそういう観点でいける。さらにこれは保存区域が次に出てきます。それでいいと思います。上江洲さんがおっしゃっていたものは、こういう群の中からストーリー化していって、これを観光コースに導いていく事ができるわけです。嘉手納さんが言っていたのも古い原始時代は海、山との生活があって、そして農業社会に入っていき、グスクが造られていく。群の何を取るかで編成されるわけだから、それはそれでここでも利用のやり方はできると思います。結構群分けしていると思いますが、まだあるのかあるいは多すぎるのかとか、そういうのを含めて頭をひねって、みなさんがこの文化財を使ってどういうストーリーで活性化につなげていくかという事を考えつつこれを考えると非常にいいと思います。基本構想というのは人材育成にもつながります。基本構想を作ってそれだけではなくて、きちんと案内できる人が必要で、人がしかできませんからこの中に人材育成が恐らく謳われてきます。あまり学問的すぎず自分たちが今いる場所でどのように使っていくか、ムラの活性化にどのように結び付けていくかを考えて群分けをするのが大事です。

東恩納教育長：念頭平松は今は全く生活と関係がないかもしれないですが、過去はこの松の下が村道になっていました。だから念頭平松は１つの御願所になっていて御嶽の一種だったと思います。

安里課長：那覇口の所にあるタンナ原、農地の一番北の方には昭和 40 年代ぐらいまで民家がありました。

東恩納教育長：念頭平松は田名のいろんな祭りごととの関係性の中で束ねられるかな思います。これだけの内容を含んでいるので島の広い範囲を国指定というのはできないですか。

＜田名等の文化的景観＞

當眞先生：文化庁は文化的景観ということで、反応は聞いていませんが、田名の水田地帯とか調査は入ったはずです。文化的景観という指定は可能です。今現在の日本のやり方は、文化的景観というのは水田の棚田の形態とかいうのが主流になっているようです。

ただ、念頭平松は天然記念物になっているが、岩などと違って人間がかわいがってあれだけの良い松にしているのです。そういう面からすれば、人間の生活、ムラの人々の生活との関わりで記念碑的なものだから、それはそれでいいと思います。ムラが点在しているわけだから、やはり村人たちがせっせと育てているわけです。

安里課長：すぐ下には水田があって、上の方にはサトウキビ畑などがあって、そのちょっと先に行くと東ガジナの貝塚です。そこら辺の関わりでずっと人間がいたのだろうと。今は平場みたいになっているが、前の地形を見れば多少小高い丘になっていた。枝の張っているすぐ下の村道だった所のすぐ下は５ｍぐらい落ち込んでいる。

當眞先生：文化的景観の場合はあくまでも地理的な広がりがひとつのポイントになってきます。

安里課長：那覇口の所は相当栄えていた。今でも山側に水田跡があります。現在牧場になっている所の奥にも水田があってアサトダーといって、ケイハンの跡がまだあります。

MUI 景画 山口：活用区域について説明

＜活用区域の捉え方＞
當眞先生:歴史文化基本構想は行政を進めていく上でも非常に有効です。村の活性化をしていこうという場合も、こういうのがあると人材育成につながります。今まではバラバラに教養として入ってきていたものが１つのまとまったものになっていきますから、それを観光コースに抽出しながらやっていけば、村のＰＲにつながる構想です。現代にマッチしたものじゃないかと思います。

東恩納教育長：これだけの資料収集してやったものを、できれば各集落単位で、今日の内容だけでいいから説明会をやればいいという気持ちがあります。

當眞先生：基本構想をやっていく中でそういうのが出てきます。

伊礼副村長：ヒアリングでもその要望があります。我々にヒアリングしたけれどあれはどうなったか、というのがよくあります。

當眞先生：これができているからやりやすいですよ。今までは灯台下暗しで見ていなかったけれども、すごいのがあるんだ、と誇りになります。今まで点でやっていて、「県指定の久里原があるがまだ整備されていないんだね」というのが、パッケージにされると我々が住んでいるのは何千年も昔から人が住んで開発していた場所なんだと誇りにつながります。

名嘉教育課長：生涯教育の中で私たちが教室を開設する時に、例えばチャートの分野で何回かやって先生方をお呼びして勉強会を持つというのもできると思いました。

安里課長：生きてきた中での知識で話をしているんですが、裏付け的な文献から調べていくと念頭平松の樹齢ひとつにしても、自分たちは 500 年近いというイメージや教え方をされてきたのですが、270 年だというのが文献に残っていてはっきりしたというのをみると、全然違う感覚です。それもありますし、私たちは破壊をしてきた人間ですから、前回も話をしましたが印部石の事さえも知らないで現在をなんとかしなくちゃと、原風景を全部壊してきたりしたので、破壊をしてきたんだなぁと、回を重ねるごとに思います。しかし、まだまだ新たに発見されたグスクが出てきたり、伊平屋の人でも知らないものが発見されたりして驚きもあり、これ以上のものは失いたくない。先ほど教育長が話されたように、さらにこれを基にしていろんな事業に取り組むようにして、いかにして島の活性化につなげるかです。人材育成でも島内の観光案内をしている人たちが、それぞれ違う知識で伊平屋村を語っていたりしていたものが統一されることも大きな財産になる感じがします。
　教育長は広大な考えを持っていて島自体を保護区みたいなのはどうかというお話がありましたが、島自体がもしそういうのができれば、やんばるでもそうですし、鹿児島の諸島もそういう形を取りつつありますから伊平屋もそれに入ってもおかしくないという気もします。ぜひこれをうまくまとめていただいて、大きな財産にしたいと思います。

當眞先生：提案されたゾーニングについて、このくくりを石下墓も入れて念頭平松、平地部をひとつにして、島の成り立ち云々ゾーンは久葉山からクマヤー、裏側からチャートの山アサ岳ぐらいまで入れてやったらどうだろ

うか。石下墓は上に入れるよりは、むしろ琉球の暮らしと祭りを伝えるゾーン、今は忘れかけているけれども共同墓地、そして念頭平松も入れれば、生活の中に入れたいですね。
島の成り立ちで西海岸の山並みを入れて、那覇口までは入れていいと思うし、まあ、生活圏に入れてもいいとも思う。くくりはそんなに問題ではない。今のゾーンはネーミングは非常に良いと思う。今後は地元の方が伊平屋をどのように見たいか、というのが一番大事になってくる。
　杣山竿入帳はあれだけの古文書があるから、研究者の中にはわざわざ伊平屋にきて、あの竿入帳が本当に精密度があるとかいう事を現地を踏んでやったりしています。

名嘉教育課長：２回目の検討委員会の感想をお願いします。

野甫課長：前回も話しましたが、まだ勉強中です。昔の土地改良をしない時に一旦調査が入っていればもっといい情報が収集できたのではないかと思います。もしかしたら印部石などの標準点がどこかにあったかもしれないです。

當眞先生：印部石と土手が見つかれば最高です。恐らく見つかる可能性があります。それから欲を言えば碇石。これがだいたい200～300 kgぐらいの碇石が見つかるとここに外洋船が入ったという証拠になります。

西藤：印部石も一生懸命探していますが、私は海に潜れますので碇石も探しています。ウミンチュの付き合いが長いのでウミンチュに渡す資料を作って、漁協にもおいてもらって、配って歩いて探すのをお願いしようと思っています。どれか１つひっかかれば大きく変わると思います。

東恩納教育長：わがふるさと伊平屋島がこんなに太古のロマンを創出して頂いてMUI景画の皆さん、本当にありがとうございます。伊平屋に住んでいる私どもは、當眞先生の英知を頂きながらまた皆さんがたの支持をいただきながらどのように構築していくのかとかいう事は、大きな村の課題になるかなとも思います。ひとつひとつ伊平屋島をすばらしい発信基地にしたいという考え方で、今日はお礼と終わりの言葉にしたいと思いますが、引き続きもっともっとより良い方向に向かってご指示ご支援方をお願いしたいと思います。本日は本当にありがとうございました。

名嘉教育課長：では今日の検討委員会はこれで終わります。

平成 28 年度伊平屋村歴史文化基本構想策定業務　第３回策定委員会

日　時　平成 29 年２月７日（火）14：00～17:15
出席者　伊礼清委員長（副村長）、東恩納吉一（教育長）
　　當眞嗣一委員、名嘉和子教育課長、安里充建設課長、東恩納厚（農林水産課）
　　上江洲推進室長
　　嘉手納知子、西藤優三（伊平屋村歴史民俗資料館）
　　山口洋子、山口一樹、伊敷美里（(有)MUI 景画）

委員長挨拶　伊礼清副村長

伊礼副村長：前回は歴史文化基本構想に取り組む意義や背景、目的、村の歴史文化の特性に基づいた伊平屋村歴史文化基本保存活用区域案等について議論しました。今回は、お手元の「伊平屋村歴史文化基本構想」第３回委員会資料について事務局から説明をお願いします。

MUI 景画 山口：資料説明
伊平屋島・野甫島に関する追加悉皆調査
・野甫島及び伊平屋島等のジオ関連調査
・集落関連聞き取り調査
・田名グスクと周辺現地踏査
伊平屋村歴史文化基本構想 ー琉球国の兆しー
・関連文化財群と歴史文化保存活用区域の考え方
・歴史文化保存活用区域の方向性

伊礼副村長：ただいま構想の全体的な流れの説明を聞きました。當眞先生から歴史文化基本構想のねらいやグスク群についてお話を聞きたいと思います。

＜歴史文化構想のねらい＞
當眞先生：私も 40 年余り文化財行政にいましたが文化財というのは点で指定をして残しましょう、とやります。また、文化財が豊富で素晴らしい土地ですよと学者の先生方が言っても、それだけでは何の価値があるのかと、地元としては何の利益があるのかと出てくるわけです。だから文化財を行政で守りましょうと強く言っても、これまではあまりピンとこなかったわけです。
その矢先に文化庁は、歴史文化基本構想として関連する文化財を大きなかたまりで守りながら活用していくという考えが出されました。
　この視点から言えば、提案された今回の構想はすばらしいかたまりを作って頂いたと思います。このかたまりが机の上でただ線を引くのではなくて、物語があってかたまりを作る。そしてこのかたま

りをどう活かそうか、活かし方や課題が今後の検討になります。

最初は文化財悉皆調査なんて何をやっているのかなと思っていたと思いますが、やっぱり今のような話をやるためには、ここのかたまりをきちんとわかってないといけないわけです。それで文化財悉皆調査をやっているが、まだまだ調査不足の所がたくさんあります。

すでに 1960 年代に高宮先生や多和田先生たちが一応調査されていました。単体でいろんな貝塚などが見つかったりはしていましたが、全体の姿というのはまだ捉えられていなかったです。そして新しい時代、考古学では原始時代と言いますが、日本史で言えば中世です。沖縄の歴史で言えば琉球王国ができあがる時の話。ここは屋蔵大主伝説として残っている。非常に大事なのだが、どういう形でこの遺跡と結びつくのかという事がまだわかっていなかった。伝承はたくさんある。けれどもそれが本当に学術的にどう結びつくのか。伝承というのはある面では言い伝えですから嘘もあるわけです。フィクションも出てくるわけです。しかしどうも伊平屋はその意味では、ただ話だけがあったのではないんじゃないかという事で止まっていたわけです。

＜渡来人が往来した伊平屋近海＞

今回細かく調査をしていくと、いろんな事が出てきた。私もついうっかりして考えつかなかったのですが、ヤヘーグスクは島の人が造ったのではないというのが確実にわかりました。屋蔵大主も島の人じゃないというのが色々伝承されていたのですが、伊平屋というのは沖縄本島の最北端、それから奄美につながって九州にもつながるわけです。それだけじゃなくて朝鮮半島、今で言えば韓国、中国にもつながる場所です。その一例の面白い話に「チンカンシロク」というのがあります。チンカンという人が中国皇帝の使者として冊封に来ます。尚清王の時、尚真王が亡くなって新しい王様の承認をするために中国皇帝の使者たちが来る。これを冊封使と言います。尚真王の次の尚清王が王様になる時に、チンカンという人が中国からやって来る。しかし遭難します。最近このチンカンシロクを原田さんという医者が全部訳して読みやすくなっているのがあります。ぜひ読まれてください。チンカンという人は中国から船旅をしますが、ものすごく大変なんです。沖縄ではトゥータビとか言いますけど、遭難して伊平屋に着きます。嵐に合って気が付いたら伊平屋島が見えると船乗りが言って、1 週間以上漂流するんですが伊平屋島が見えて大丈夫と。このチンカンという人の記録を読むと、伊平屋に 1 週間ぐらいいる。尚清王代というのは 1500 年の前半ですから非常に古いです。そこから首里の王様は 4 千人派遣して船を那覇港まで引くのですが、それがまた難渋する事が書いてあります。

私が今言いたいのは、伊平屋島は中国から来ても伊平屋島に着くわけです。今の東シナ海、尖閣の沖合に大きな黒潮の流れがあります。これを超えないと大変だったらしく、図面にはここを滝みたいに書いてあります。そこで潮に乗って一気に北上して一気に離れて、そして久米島に行って、久米島から那覇に行く。だけどチンカンさんは黒潮に乗ると同時に漂流して伊平屋に着いた。それでもここは琉球国内だから首里の王様から 4 千名派遣して引いていくのです。小舟を何十槽も派遣して引いていくんです。それは伊平屋の人が手伝わないとだめですよね。しかしその記録は細かくはない。とにかく 1 週間がかりで那覇まで引いていったという話がある。この伊平屋は、そういうような人たちも来る。ある面では沖縄の表玄関になるわけです。

ところで、ヤヘーグスクは最初島の人が交易をするためかと思っていたのだが、よくよく考えてみると、島の人がわざわざ渡れなくなるような場所には城という軍事施設を造る必要がない。渡来人が造ったという事になぜ気が付かなかったかと私は反省しております。

＜グスクの築城技術や縄張り＞

次に、田名グスクの造り方は、上には石垣があって、上って行く時に削平段といって段々畑みたいなものがたくさんあります。それは畑ではなくて、そこに上らせて上まで行かせないという構造です。これは大和の山城にたくさんあり、沖縄のグスクでは久米島の宇江城という所です。これも 300mの山の上にあって、けれども集落がグスクより 20m低い所にある。田名グスクの構造を見ると久米島の宇江城と全く一緒で、私は今までそれだけにとどまっていました。

家や公共施設を見ると、設計者によって特徴が出ます。だから私たちはグスクを見て、造り方を見てどれと似ているというのを比べているわけです。田名グスクと久米島の宇江城は非常に似通った造り方をしているというのは前から知っていましたが、それだけではないです。調べてみましたら、久米具志川間切り旧記という今から数百年前に書かれた古文書があって、その中に宇江城を造った人の名前が色々あります。その中にティーアントゥールーという３兄弟の石工、つまりイシゼークがいて彼らが石大工で城づくりをした。けれども彼らは城を造った後、この宇江城の按司にちょっとした誤解で排斥され、そのティーアントゥールーたちは伊平屋に来ているわけです。ちゃんとその古文書の中に３兄弟が伊平屋に来ましたと書いてある。島に上がったら、どうもどこの島かよくわからないからトゥルマールーしていたら（ボンヤリしていたら）島の人が来て、あなた方はいい人だから娘を貰いなさいと３名とも嫁をもらって結婚してここで生活をしている。けれどもそれから数年後、尚清王のお父さんの尚真王が久米島征伐をするという話を３兄弟は聞いて、今こそ自分たちの恨みを果たすのだという事で首里城の軍に加わって久米島に行くわけです。それで実は久米島の宇江城というのは、皆さん行かれたことはありませんか？今度行かれてください、非常に高い山で立派な石垣で造って今国指定になって整備していますから、それは非常に難攻不落なんです。このティーアントゥールーさんたちは城づくりのノウハウをよく知っているから、彼らが率先して城を落としたという伝説があるんです。これはちゃんと具志川間切り旧記にありまして、そうすると伝説を本物だと信じるわけにはいかないけれども、つながりが出てくるわけです。外来者であるティーアントゥールーさんがここに来て、同じような城づくりをした可能性も出てきたわけです。

上里グスクは、もう亡くなりましたが考古学会のボスである方、我々の先生である方が 1960 年代に全部調査をして上里の駐車場は当時は畑だったようで、陶磁器を拾ってあるんです。つまり中国の貿易陶磁器を拾ってあるわけです。だからここは屋蔵大主と関係する屋敷跡だという事と同時に、今度は高宮先生の更に先生である多和田真淳先生の話でも、中国の宋時代から明の頃の時代の貿易陶磁器が出る、非常に注目するべき遺跡であると発表されているのです。発表されているが、我々の時代になって行ってみると駐車場になって緑で覆われているものだから、ここはもう壊されているんだなという書き方をやっているわけです。

＜土のグスク＞

今の学問は縄張りと言い、土をどのように削ってどのようにして防御施設を造ったかという視点でも見ます。上里グスクも実際調べてみたら、今の所はアスファルトが敷かれてその下にあると思うんですが、周辺にその形が壊されていなくて残っている。そしてグスクの形態とさっき言った佐敷グスクが非常に似ているんです。つまり立地です。上里グスクは石がない。石がないために、ものは出るけどグスクという認識まで至らなかった。それで土のグスクというのが今沖縄でもどんどん見つかっ

て、佐敷グスクもそうです、土のグスクがたくさんある。例えば名護グスクがそうです。上里グスクは土のグスクの典型である。土のグスクは城壁を造らないと上りやすくなるわけでしょう。つまり上りづらくしているのが城壁なんです。これは石垣でやる場合もあるし、近世になると日本では築地塀（ツイジベイ）といって漆喰で壁を造る場合もあります。上里グスクの城壁はみんな土で造っている。佐敷グスクも名護グスクも同じ。ただ、佐敷グスクの場合は土で造っているけれども、この土が風雨で崩れてくるから石を貼ってあります。石を積むんじゃなくて、土を段状に切ってそこに石を貼り付けるんです。これは貼り石状石列と学問的に呼んでいますが、これが佐敷グスクで初めて見つかって、これはすごいという事で国指定になりました。

なぜ貼り石にするかというのは、１つは土で壁を造ると雨のたびに崩れてくる。けれども石を貼ると完璧ではないが一応遅く崩れる。もう１つは土では外から見てちょっと城なのかどうかわからないから石を貼る。そうすると外から見るといくら石貼りでも石垣の城壁みたいに見えるわけです。実は上里グスクにもそれが若干あるのではないか発掘調査をきちんとしていないので、実際に切ってから石を貼っているかどうかはまだわかっていないのだが、ああいうような土の壁に石があるという事は沖縄では佐敷グスク以外にないから、非常に似ている。

最近、沖国大の上原先生が沖永良部に行きました。ヨロンヌシの城を利用して町おこしをしようと、今帰仁の仲原さんと沖国大の上原さんが呼ばれて行って、グスクを見たらやっぱり石貼りがあると言っていました。

伊平屋には生産の場所である水田地帯それから海、そういうようなものに育まれながら、その頃琉球はまだ国になっていないわけですから、琉球に渡って国づくりを始める、そういうストーリーができ上がってくるわけです。

伊是名の場合はその国づくりをした後に尚円王が出てくるわけです。だが伊平屋の場合はまだ国ができていない段階の時に、もし今私が言ったことが事実だとすれば、ここを出発点として沖縄本島に渡って、そこで国づくりを始めたというストーリーが描けてくるわけですね。だから「琉球国の兆し」はいいですね。こういう歴史文化基本構想というのは裏付けがあって、ただ机の上でグルーピングして物語を作ったというものとは違って事実に基づいた、つまり文化財に基づいた構想ですから、今後もすごく生きるんじゃないかなと思います。

伊礼副村長：ありがとうございました。只今お二方に全体の流れを説明してもらいました。これまで聞いてみますと「琉球国の兆し」という事で、これは語弊があるかもしれませんけれども、琉球の歴史の欠落している部分をこの基本構想の中から何か生まれそうな雰囲気が見えるという感じを受けました。それは個人的な話でもありますけれども、やはり琉球の歴史の話で現在出ているのはいつも琉球王府、尚円とかその辺りから始まっているような所があります。一番面白いと思ったのが島の成り立ちからもっと掘り下げてやってきた点で、伊平屋ならではのストーリーになるんじゃないかなという事です。

－休憩－

伊礼副村長：それでは再開しましょう。色々話が出てきております。意見交換したいと思います。

MUI 景画 山口：資料説明
伊平屋村歴史文化基本構想 －琉球国の兆し－
・保存活用に向けた課題

＜遺跡の発見報告＞
當眞先生：ちょっと話が別ですが、賀陽グスクや腰岳山頂等遺跡などを早目に県に対して遺跡名を出さないといけないですよ。この前も県の上地さんが言っていましたでしょう。これは遺跡名を村から

報告して出さないと認定されないです。遺跡かどうかわからないという事で補助金の申請もできないです。(賀陽グスクもまだ) こっちから申請しないといけないです。発見届けというのを出さないといけない。新しいのは全部教育委員会で名前を付けて申請するんです。賀陽もただ石垣があるというだけでまだ遺跡になっていないです。上里は遺跡になっている。私は今回論文では上里グスク遺跡と私は呼びますと、戸籍では上里遺跡ともうすでに周知されています。
教育長さん早目に出した方がいいですよ。

＜構想の周知＞
伊礼副村長：構想を周知する方法はどういう方法があるのでしょうか。

當眞先生：西原町では、教育委員会が町内の部課長みんなを集めてやったと言っていました。まず横の連携を図る事が重要で、職員を含めてもいいんじゃないですか。
伊礼副村長：基本構想でのストーリーがだいたい決まっているのであれば、今いろんなブックを作っていますが、広報用という事で観光サイドからも作れますし、それを基にしてどんどん広めていくという方法も年次的に検討ができると思います。

MUI 景画 山口：構想というのは仮説やある考え方でまとめているので、まだぼやけた状態です。今後はそれを裏付ける調査を実施しながら具体化していく段階が必要です。時間がかかりますけれども構想そのものはこういう事で作りました、というのは周知した方がいいと思います。
伊礼副村長：パンフレットというのは、この構想段階を基にして伊平屋村は年次的にこれをやっていきますよという事等をパンフレットにできないかという事なのです。

＜遺跡調査のメニューや進め方＞
當眞先生：これは早目に作った方がいいです。ビジュアル化して、それはみんなイメージが湧きます。
　ところでこの課題の中に、遺跡調査の実施と推進体制の強化というのがあります。これまでは伊平屋の発掘調査は土地改良するためには否応なく地下に埋蔵されているものを調べないといけないという文化財保護法によって村がやっているのだが、あの頃は村に職員があまりいないから県から今高校教員をしている西銘君とかセンター所長をしている金城亀信君などを派遣して、みんなでやっています。それを基に今度は土地改良も進んで、指示を受けており、下には貝塚が眠っているわけです。
土地改良は住民負担になるから、結局文化庁から予算を取ってやったわけです。その場合に村が担当者になって恐らく 2～300 万補助金をもらってやっているわけですが、全面発掘はできないわけで埋められています。
　遺跡調査には重要遺跡確認調査等のメニューが文化庁にあります。自分たちがこれを大事にしたいという場合に、重要遺跡確認調査という事業を使って国の補助 80%でこれができるわけです。
私の時代には県も 10%出していましたが、今は県は持たないです。それで 20%は自己負担。その事業を、県文化財係の上地さんが出してもいいと、国と相談してもいいと言っている。このお金は大きな土木事業みたいに企業が入るわけじゃなくてここで雇ってやるわけです。だからある面では失業対策みたいになるんです。皆さんもよくお分かりだと思います。継続してできるこの事業を入れたらどうかと上地さんが話しています。沖国大の上原さん辺りは実習があるから彼らにさせたらどうかという話もあると思います。国指定が増えていけば土地買い上げしたり、それから毎年２千万ぐらいの発掘をして石垣を直していくわけです。
　そういう準備のためにも国の文化財に指定しないとできませんよという話で、歴史文化基本構想が基礎になってすごく活かされるという話なのです。
　文化庁は沖縄に関しては結構補助金を出します。ヒバンムイ（遠目番・火立て屋）は宮古、八重山

で国指定されているが沖縄本島がまだです。沖縄本島に先駆けて伊平屋にまず入れようというのを上地さんが言っている。
　私が専門にしているグスクも重要遺跡確認調査という補助金があります。村がやれる体制がないとだめだという話なんです。

伊礼副村長：重要遺跡調査と言うのですか？これは国指定が条件という事ですか。

當眞先生：いや、そういう事はありません。それに持っていく前にそういう調査をして委員会を開いて、学術的にきちんとして国に持っていくのです。

伊礼副村長：この調査を入れるからには次の段階としては国指定が条件ですよ、というのですか。

當眞先生：条件ではないです。村がやりたくなければやらなくてもいい、これは条件はないです。ただ重要遺跡の調査をしますから補助金をくださいと言えば補助金が 80%下りるのは確実です。

事務局（嘉手納）：市町村に考古の職員がいないといけないのですか。

當眞先生：そうです。村には村の人事もあるはずだから、当面は沖国大の上原さんにお願いしてやったらどうかと。私は彼に伊平屋に入ったらいいよと言っているのだけれども、問題は私がさせるわけではないですが、話はしてあります。県文化課の上地さんの話では当面は上原さんにやって頂いて、そしたら新聞が追い付いてくるんですよ。何か発見したらもう大変な話になると思います。すぐ尚巴志と結びつくから。でも、村がその気にならなければ動かないです。
東恩納教育長：私が体力というのはそういう事を言っているのです。
當眞先生：西原町も内間御殿を指定する時に職員がいなかったのです。山里さんという女性が１人やっていましたが、これでは国は補助金を出せませんよと言ったので、公募で試験で山田君を入れて今やっています。

伊礼副村長：これは遺跡調査の専門ですか。

當眞先生：そうです。これは事務をやりながらではできないです。報告書を作って、それを今度は委員会で議論をして、国の歴史を理解する上でこれは重要ですかという事になると文化庁は指定するわけです。国が指定したらどうなるかと言うと、土地買い上が始まります。そして史跡としてちゃんと整備しましょうという場合に整備費用が国から補助金がある。今は久米島とか今帰仁もそうですし、八重山もやっています。
　発掘調査をすると地元の人たちもだいたい 20 名ぐらい雇わないといけないです。それも何カ年も続きます。それで図面を書いたりするのがうまくなります。どこかの土木業者が大きなものを持っていくのではなくて、地元に全部落ちるわけです。早目にやった方がいいです。

東恩納教育長：最初の頃はやはり専門の人を呼んで、その方々の指導を受けながらやらないととんでもない事になります。

當眞先生：佐敷もそうですが、あちこち委員会を開いて学術的にまとめて、国がこれを国指定にするという段階を今は踏まないとだめです。西原町の内間御殿もすぐ国指定にはなっていないです。調査して報告書を作ってそれを国がじゃあいきましょうといって指定して、それで１年で一気に土地買い上げをした。

＜構想の活かし方＞
伊礼副村長：我々が一番課題になっているのは、やはり地元の、我々伊平屋の足元がわからないという、これがいろんな事業のところで引っ掛かるのです。ですから宝もの探しというのが始まった段階

で本当に伊平屋島を知る事が大切です。今日もその話が出て、それこそ方向性が見えてくれば今各担当のところでもつまづいているのはその辺ですから、この事業化であったりいろんなもので内外で示せるんじゃないかと思います。今総務でも土地利用をどうにかしなさいという事で、いろんな部署も困っているという声がある。今回のこの構想自体、現段階でもいいからこれを利用させてもらえば、保存すべき所や活用すべき所等、土地利用の方向性も見えてくる。

當眞先生：前に副村長がおっしゃっていた自然も大事だという事で、メランジュなども含めて今回はそれも入っていますからこの委員会の意見が相当反映されています。

文化庁には天然記念物とか動植物を見る人はいらっしゃるんですよ。だが地質関係がいないものだから、これは文化庁にも持っていったらすぐ飛びついてきます。ただ天然記念物はさっき私が言ったように史跡とはちょっと違って恒常的な予算が取れないのです。皆さんおわかりのように、念頭平松で防除をするとか駆除をするとか単発的なものは文化庁の補助金のメニューにも入っているはずなんだが、整備をしてどうのこうのというのはあまりメニューはないんです。史跡の場合は今のような遺跡の調査から始まって歴史の道の事業とかいろんな事業がありますから、それでかなりいいという事です。だから国指定を進めていけばすごい宝ものの活用になります。

＜整備事業に関わる貝塚＞

東恩納：田名西貝塚というのがありますが、ここは圃場整備計画がありまして、県で今地権者を調べています。採択するとここが若干引っ掛かる可能性があるので、どういうふうに、例えばかさ上げをするのかとか事前に調整できればいいかと思います。

當眞先生：田名西貝塚は当面の問題として文化課は承知していますか。早目にしないと予算取れないですよ。これはもし土地改良課からお金が出ないと、農林省が出さなければ文化庁がやりましょうとなると文化庁は予算待ちします。つまり壊されるものについては待たないといけないわけです。本当は土地改良の方がやるべきだというのが考え方なのですが、圃場整備事業をやる土地、村の話じゃないです、県の担当などが逃げようとするんです。壊すための調査は早目にした方が良いと思います。

安里課長：シャコガイとか、これは割ったであろう台の石、真ん中がちょっとへこんでいるそれもありました。その石は見えましたけど、誰が持っていったかなくなっていた。叩いて真ん中だけがちょっとへこんでいる石です。野甫から出たものはナイフとか矢尻とか出ています。
田名グスクの石は四角ですけど賀陽山は丸っこいのを積んでいますよね。

當眞先生：その辺も具体的に調査をしないといけない。チャートではあります。田名グスクの場合はどうも石切り場らしいのがあるんです。

＜賀陽グスク＞

伊礼副村長：賀陽グスクは島尻の方に向いていると言うのはどんな根拠ですか。

當眞先生：賀陽グスクは三方から入って来る人がいるだろうと仮定しているんです。つまり三方からというのは賀陽グスクの門を見ると、入って来るから門を造るわけで、それがみんな尾根筋に３本あるのです。それで、向いているというのは２本が島尻の方につながっていると言っているわけですね。

具体的に説明しますと、ここに石垣があるというのはこっちに上るのを遮断しているのです。遮断

線と言います。グスク城門が島尻側に向いているのが１つ。この門の作り方は甕門（オウジョウ）といって、かぎ状になっているのです。コの字状に、入って右折れして入る。家でもヒンプンがあって右か左かと、今は右からも左からも入れるのですが普通偉い人は右から入りますとか、これはああいう格好になっている。そして賀陽から出て我喜屋から来る所の門があります。これはサカコウジといってただ坂になって、上った途端に大石があって、これもヒンプンみたいに中が見えないようになっています。入れたくない人が入ってくる可能性があるから遮断線を造るわけです。垣根を造っているというのは、ここから上がってくる人を入れないためなのです。

＜上里遺跡と腰岳山頂グスク＞

屋蔵大主と関係する上里遺跡は、やはり時代的には屋蔵大主が生きている頃のものが出てくる。1960 年代までアスファルトで覆われていない頃ここは畑で、沖国大の高宮先生がものを拾っている事が報告されています。これからずっと道があって腰岳に登るとここに石垣が出てきたんです。これは全部ハチマキ状に囲って門を持っているわけだが、入口は２つある。巻かれていない所は全部断崖絶壁です。ここの人達がダダダーッと攻め込まれて、もう自分たちの所では抑える事ができない、そうすると逃げるわけです。これは逃げ城と言って大和にはこういうタイプのものはいくらでもあります。というような意味があるという話です。

上里遺跡から 1960 年代に先生がものを拾ってあるのですが、先生の家が火災にあったのです。拾ったのが 1960 年代ですから恐らくないだろう。けれども周辺には残っているから掘れば出てくるのではないか。そういう作業を文化庁は補助金を出すから、それを使ってやったらどうですかというのが今の話です。

安里課長：上里遺跡は畑にした時に結構いろんなものが出てきていたという話です。

當眞先生：山内さんに聞いたら、自分は上をさらってやっただけで、あんまり動かしていないと言っていた。じゃあ何か出てきましたかと聞いたら、そんなのは気が付きません、私はガガッとやっていないから、ただ掃除をするような感じで上を平坦にしただけだから、という話を聞いたんです。

安里課長：畑にしていた戦後間もない頃に、結構いろんなものが出てきたという話を聞いた事があります。

當眞先生：それが埋まっていますよ、という話なんです。それが埋まっているのが明らかになると、屋蔵大主がいたと言われて伝承があるから遺跡の存在が生きてくるわけです。

貼り石はここの部分。ここも可能性はあるが、もしこれが貼り石だったら、佐敷グスクをしのぐくらいの貼り石ですね。

東恩納教育長：東側にダムみたいな池が今ありますよね。この周辺も結構貼り石的な形で段々畑みたいな感じになっている。片隈神社の所。

當眞先生：私は上里遺跡とはしないで、この山側やこの屋敷だと言われているのも含めて上里グスク遺跡と呼びますとした。これは私の論文の話だから行政的にはここは上里遺跡として登録されているのです。ダムだった所の上の棚田は我々が見ると昔の畑のアブシだと思います。

MUI 景画 山口：先ほど當眞先生がおっしゃった賀陽グスクの甕城というのは朝鮮半島系のものですか。

＜グスク様式の類似性＞

當眞先生：そうです。甕門というのは門を造る場合に壁を造って穴を開けるものと、入れられないために入口を曲げて造るとか、いろんな造り方をします。それが賀陽グスクは中国や朝鮮に起源を持つ

甕門なんです。これは国指定の糸数グスクに１つあります。だけど糸数グスクは古い時代に埋められたんです。つまり石垣を積まれて形はあるが、もう門にはなっていない。ここは門のまま残っている。これはびっくりします。

伊礼副村長：やっぱり佐敷、玉城辺りとつながっているわけですね。

當眞先生：入口ではなく「チ」というのがあり、角上に石垣を張り出しているんです。これは糸満の具志川グスクとか、糸満の戦跡がありますがあそこにグスクが 300mおきにあるのですが、そのグスクがみんな張り出し部分があって、それと似ている。張り出し部分があるのは久米島もそうです。それから喜屋武間切りです。それが中部にはない。それは中南部になると勝連ぐらいまで行かないとない。だからこれは先進地域なんです。読谷の座喜味もあります。でもあれは、これよりずっと新しくなります。あの段階になると首里城にも出てきます。首里城の歓会門、そこに飛び出しているのが左側にあります。あれを言っているのです。グスクの造り方を見ると本当に面白いなと思います。

安里課長:自分たちはいい時期に行って見てきましたね。最後に見た佐敷のあれは興味深かったです。

當眞先生：糸数グスクも見ましたね。あれはもう国指定になって土地買い上げをして整備も進んでいます。ここと佐敷グスクの立地は非常に似ています。前に畑、海があって、そして両脇囲まれて。

＜御嶽に関して＞
伊礼副村長:話はちょっと違いますが、ウタキ、ウイベと読むのですか？御イベはどんな意味ですか。

當眞先生：御嶽には神の依り代がないといけないわけです。大和流に言えば。神様が降りられる場所で、神様のご本体みたいな場所です。大和の場合は社があって拝む場所拝殿があって、そして神殿があります。元々沖縄の御嶽はそういうタイプじゃなくて、拝む場所は建物もなくて広場があるのです。そして拝んでいる対象はどこですか、となるとなかなかわからない。わからないけれども御イベというのがあって、たまにはガジュマルがあったり石があったりする。つまり神様がいらっしゃる場所、これを何々の御イベと言う。これは神様がいらっしゃるわけですから神様の名前にもなるのです。

伊礼副村長：御庭とか日本みたいな感じの捉え方ではなくて物ですか。

當眞先生：御庭は広場です。片隈神社もまず拝殿がありますでしょう。建物が作られている。その後ろに石がありますよ。あれが片隈の御イベじゃないですか。片隈御嶽があって、じゃあどこですかといったらこの一帯ですよ、ぐらいです。御イベはどこですかといったらここですと。

伊礼副村長：建物の中にあるあれではないのですか。

當眞先生：その後ろにあるんです。宮古・八重山ははっきりしている。宮古・八重山は石垣で囲ってそこに門がある。その門から中は誰も入れないです。そこの中心の奥の方にちゃんと石がある。神の依り代なんです。神がいらっしゃる場所、御イベ。つまり神様の名前で呼ばれています。
　片隈神社は本当は片隈御嶽なのか、あれは由来記では片隈御嶽だったのですか。

MUI 景画 山口：片隈と書いてあるのですが、コシアテという言葉も出ます。

當眞先生：コシアテムイでしょう。コシアテムイは腰岳の所ではないですか。
これは色々な考え方があっていいんです。さっきの公儀御嶽（クージウタキ）というのは公認の御嶽なのです。首里王府が由来記という本を作る時に各市町村に文書を発給してちゃんと御嶽名を上げさせている。そして首里王府はそれを帳簿に記録し、この中に御嶽名が書かれているのが公儀御嶽です。

MUI 景画 山口：前に上江洲先生が「神社」というのはやめて御嶽に戻した方がいいんじゃないかと言

っておられました。

當眞先生：私が書いた田名神社は論文でも直しましたが、田名神社はちゃんと田名区の本に直しましたと書いてある。古い時代の呼び方に戻さないとだめです。

東恩納教育長：片隈という地名も由縁があるのでしょうか。

當眞先生：片隈は由来記に出ているでしょう。これは国土地理院が図面を作る時に修正できます。田名屋に直してくださいと言えば、国土地理院は改定するでしょう。だけど正式には田名区で神社にすると字のクシ（区誌？）には書いてあります。元に戻すとなると区が変更する必要があります。

東恩納教育長：小さい頃の記憶では今の神社ではなく、奥の中腹ぐらいにあったんです。中腹ぐらいにあって、そこには誰も行けなかった。

安里課長：そうです、まだあります。奥のお宮という神聖な所だから近寄るなと言われていました。

東恩納教育長：田名部落のお婆さんがいたよね。

安里課長：イリシキのおばあです。

東恩納教育長：その人しか行けないんです。

安里課長：奥のお宮という言い方をしていました。

當眞先生：ウッカー御嶽ですか？そうでしょうね。あれはやはり男子禁制だから。

東恩納教育長：豊年祭の時、今の神社のこの辺に広場があって、そこで舞台を作っていろいろやったりしました。

當眞先生：ここで大事なのは、こういう神秘的なベールで包まれているものを明らかにしようという事ではなくて、こういうようなものはこういうようにして残して古い名前にする。けれども文化財としての利活用はうんとやりましょうという事です。ここに神秘的なものが色々あるというだけでも癒しの島になるし、非常に良いことです。

安里課長：この間も若い女の子たちに田名神社はどこですかと聞かれました。

當眞先生：そういう人も今たくさんいますよ。みなさんのインターネットを見たら、賀陽グスクにも山登りをしたりしている人がたくさんいますね。これを体系的に行政がリードしてやりましょうということなんです。今のままでは虫食いみたいになって何かよくわからないが、ただ興味本位にとなるから、それを行政的に考えてやりましょうということです。

＜基本構想の内容と今後＞

MUI 景画 山口：當眞先生、基本構想は今回の資料に示したこの程度の内容にしながら、若干写真や図面などを補足しようと思うのですけれど、いいですか。

當眞先生：いいんじゃないですか。これはあくまでも青写真みたいな構想ですから。次の段階はそれを具体化すると基本計画とか、あるいはさらに現場で具体化する実施設計とかの段階になります。

MUI 景画 山口：次回、４回目の委員会の持ち方ですが、他の方もお呼びして當眞先生の講演会もやりながら、ざっとした説明するというのはどうですか。

當眞先生：西原町の場合は構想ができ上がる前に町内の部課長会議で教育委員会から説明をして、部課長の意見が集まったらそれを反映させるやり方です。あくまでも構想ですから教育委員会だけの問

題じゃなくて、各部局が自分たちの事業の中にこういう構想を活かそうという事をやっています。
　伊平屋村もこれができたら、村の考え方として発表する。そうすると各部局はこういうものをどのように活かしていくかという事で、後はまた別の予算があるはずですから、都市づくりとかいろんなところでこういうものをどのように活かしていくかという段階になります。
　今後は行政諸官庁とパイプを取って予算を引っ張ってきて、どんどん事業に移します。例えば今ムーンライトマラソンをなさっているが、今のままではなくて、これだけ調べ上げられているから標識を作る。それからちょっとしたパンフレットを作って、伊平屋というのは単なる自然を皆さんは歩いているのではなくて歴史の考古の所を走っているんですとか、伊平屋は琉球王国を作った人の誕生した場所なのかとかＰＲすれば価値が倍になります。今後はこういう形でやれば村民もまた理解を示して、宝ものだから守っていこうと、そういう事のためにこれを作り、活用していこうというのです。

伊礼副村長：構想の次の段階で計画とかに移っていくはずなのですが、いわゆる推進体制とか計画の考え方とか、次なるステップについての事項を追加した方が具体化しやすいと思います。

東恩納教育長：せっかく３年がかりでやっているものを目出しにしなければ意味がないと思います。整理したものを読み込んだ上で意見交換をした方がいいです。ある程度構想が固まってステップアップしていける体制、事業化とか、指定するかとかそういうものの方向性を示しながら関心を持つ人たちを集めて、新たな所で話を進めるような段階を踏むのがいいと思います。これだけ汗をかいてやってきた人たちの話というのは説得力があります。そこまではぜひ考えないと、と思います。

當眞先生:インターネットの使い方もあるんですよ。総務部なども参加させて発信すればいいんです。皆さんのホームページてるしのＮＥＴを開いたら、こういうのがないから、もっともっとＰＲしていいわけです。

安里課長：自分の周りに結構こういうのを見せてくれと来る人がいるんです。これは持ち出し禁止ですから役場で見てくださいという事で、私の机の前で読んでいって、次はどういうことをやるの？とかいって関心を示す方が２人いらっしゃいます。
議会の中にもいます。イチャジチの話をしてそれをちょっと売りにしたいとか、まだ皆さんに話をしていないですけれども、すごいウバメガシがあるんです。すぐ近くですけど、神聖な所だという事で区長さんの許可が必要です。それもまだ実物を見た事がないという人が結構います。
伊礼副村長：区長さんとか関わった方々というか、そういう方々にもオブザーバー的に参加してもらうのも良いと思う。

東恩納教育長：商工会の代表、観光協会なども。

上江洲室長:今後はオブザーバーで観光協会の会長であったり商工会長が入って、これはよかったよ、だから会員にも伝えた方がいいよねという次のステップに行くための動機づけとしては、これはすごく活用できるものです。
次回の日程までに、例えばこんなに大量の資料を皆さんが読むというのは大変なので、この１冊だけは読んで次の会合には来ようかとか、そういった話が上がってくるといいなと思います。そうでないと２時から始まって５時までやっても話は尽きないじゃないですか。３カ年で色々調べているのに。私たちも昨日ちょっと読んでは来ましたけど興味を惹かれるものが結構あるので、こういったものをもっと読み込みしてから、皆さんでオープンで話ができればいいなと思います。

＜庁内の意見交換＞
伊礼副村長：今、言われた各部署がこれを読み込んで色々やりたいとか活用したいとか、いろんな意見を準備してくる。これまで関わった方々、上江洲室長から出たメンバーとか調査の段階で関わった

かなりその辺に興味のある方々も呼んで、シンポジウムではないですけれども我々がやり取りしているものを聞いてもらって、その後質問を設けるとか、そういうふうなまとめ方と言いますか、第４回は日程上もかなり厳しいはずですから、そういう方法はどうでしょうか。
今話に出たように興味を持っている方はかなりいらっしゃるのです。

當眞先生：ダイジェスト版を南城市も作っています。４ページぐらいです。悉皆調査の報告書もありますよね。あの文化財悉皆調査報告書も非常に大事なものです。今まであまりない細かい色々なものが出ているから。あれはみんなに配らないで、こういうのもあるんだよと、それをダイジェスト版にしてやればいいです。それを基に説明会を持ったらいいです。大体みんな説明会やります。これだけ予算を使っていますから、それを基に今後まちおこしをやろうじゃないですかと呼びかける。これをどう活かすかは皆さんの知恵です。

伊礼副村長：では会場はこの場所という事でやりましょうか。あまり広い会場よりは聞こえやすいですから。足りない椅子やテーブルは準備して下さい。
会場の作りは展示もありながら模型も置いて、ちょっと時間を長めにやって我々の議論する時間は何時間、参加者からの意見も出してもらうやり方にしましょう。

當眞先生：宝物をみんなに知らせて共有しましょう。つまり宝ものを皆さんあまり認識していないよという事でしょう。どんな宝ものがあるのかという、これが成果ができれば行政文書です。説明は各区長会には持っていって、文化財側からも教育委員会側からも説明しましょうと、30 分くらい時間を持ってやればいいんです。今はそれができる前の段階なので、みんなの意見を聞いてこれに反映できるからやりましょうという意味でしょう。皆さんがどういうメンバーがいいか出し合ったらいいです。

上江洲室長：ちなみにこの展示物はそのまま置いておくので、展示していますよとか告知すれば観光協会の会員で好きな人などは見に来たりするんじゃないですか。僕らも事前に勉強するとか、今、島まーいと言って島あっちぃで仁正さんたちの集落の散策をやったり山歩きをしたりして、島尻だったらイノーでイザリ漁とかやっているので、事前にここを見たらもっと深堀りできるとか、せっかく使えるすばらしい資料なので私たちだけで共有するのももったいないから見せたいなというのもあります。

當眞先生：悉皆調査報告書はちゃんとした刷り物になりましたか。こういうのは今の皆さんには非常に大切だと思います。これを見るとみんな説明できます。

東恩納教育長：ただ素人というのは変なこだわりがあるけれども、ああそうなんだ、で終わってしまうんです。だから當眞先生のニコニコしてロマンを感じるお話とか、皆さん方がやってきたものでお話をした方がより説得力があって、それをやらないと種が入っていかないです。

伊礼副村長：これは全部つながっているという話があるから余計に興味がある。

當眞先生：できるだけ協力します。

東恩納教育長：動機のある方々を集めて再度説明し、後で各集落周りするというぐらいでしょう。

＜まちづくりに活かすべき構想＞
當眞先生：行政だけではもったいないですね。行政側は各部局で予算のメニューがあるはずですからどんどん予算を取る。構想を示すと、どこの部局でも県とか国とか予算はこういうのがあるよと言うんじゃないですかね。
　今からはやっぱりまちづくりです。圃場整備や道路はだいたい収束している。人が通らない所にい

い道を造ったからこそムーンライトマラソンもできた。私が来る頃、あっちは回れなかったのです。
　ちなみに、うるま市は今まで世界遺産関連で文化庁だけで整備をしていたが、勝連城跡周辺活用事業を起こして、部署ができていて３名ほどいます。高良倉吉さんが委員長で私も入っているし、コンベンションセンターの人とか平田大一さんなども入った委員会があって大きな構想ができているのです。うるま市が実際に文化財だけじゃなくて教育委員会ももちろん入って１つの部屋を作ってやっている。今みんなそういうふうにして自分たちのむらづくりにどのようにこの文化財を核にしてやるかというのが非常に進んでいます。勝連グスクは世界遺産だがそれだけじゃない。洞窟とか９千年前のものも出ているから、あれもまた神秘的なんです。みんなドッキングしてネットでつないで色々やろうと、その構想を作っている。あちこち文化財を中心にしてそういうまちづくりをしています。そういう意味でも、私は伊平屋村は宝を持っていると思います。伊平屋村もぜひ頑張ってください。

伊礼副村長：時間は名残惜しいですけれども次回準備方をお願いして、私の方は一応事務局に返したいと思います。

當眞先生：この成果品が出る前にいろんな意見がまだあるかもしれないが、民主的にもっと広くこの事業の趣旨を広げて、意見があれば成果品に収録しましょうという事でしょう。成果品の締め切り等の前にやるんですね。いい考え方です。
これができた後は、今度は行政がみんなに周知させていくのを頑張らないといけないわけです。

事務局（嘉手納）：第４回は３月７日（火）午後２時から、ここの多目的ホールで行いたいと思います。再度繰り返しになりますが、各課からの意見や提案、課題、今の話を聞いていただく方々への呼びかけ。呼びかけるメンバーの教育委員会のリストを皆さんにメールで流しますので、それに追加する形で作っていくように進めたいと思います。それでは、第３回策定委員会を閉会します。

平成 28 年度伊平屋村歴史文化基本構想策定業務　第４回策定会議

日　時　平成 29 年３月７日（火）14：00～17:00
出席者　伊礼清委員長（副村長）、東恩納吉一（教育長）
　　當眞嗣一委員、名嘉和子教育課長、東恩納厚（農林水産課）、上原拓海（総合推進室）、
　　根路銘哲（住民課）、西銘琢也（観光協会）、上間平明（商工会）、前里澄子、諸見まりこ、
　　末吉（教育委員会）
　　嘉手納知子、西藤優三（伊平屋村歴史民俗資料館）
　　山口洋子、山口一樹、伊敷美里（(有)MUI 景画）

－第１部－

委員長挨拶　伊礼清副村長
　本日は第４回伊平屋村歴史文化基本構想策定委員会となっております。前回、たくさんの方々にこの内容を聞いてもらった方がいいのではないかという事で呼びかけをしたところ、商工会、観光協会の方々においで頂いております。基本構想の概要版もできており、かなりわかりやすい内容になっているように思います。今日は、基本構想に向けていろんな意見をお聞きしたいと思います。

歴史文化基本構想策定の経緯について
MUI 景画 山口：説明
・伊平屋村歴史文化基本構想 概要版
・第４回策定委員会資料（前回議事録）
・追加悉皆調査
・伊平屋村歴史文化基本構想 －琉球国の兆し－
　（関連文化財群と歴史文化保存活用区域の考え方、方向性）

當眞先生：＜杣山関連資料の説明に対して＞
　杣山竿入帳という古文書は伊平屋だけしか残っていないから大変な財産です。今は京都大学にありますが、他の所はもうああいう記録はないんです。

＜歴史文化基本構想のねらい＞
　今回の調査で学問的にどういうものだとわからなくても、琉球国を統一した尚巴志の曽祖父、屋蔵大主がここにいたという伝承が真実味を帯びてくる。だから、こういうものを１つセットとして、大いに利用してまちおこしをしようじゃないかというのです。伊是名は第二尚氏、尚円王の肖像まで作って、むしろ伊平屋は第二尚氏が生まれる前に最初に琉球の国づくりをした元祖になるわけだから、伊是名よりも魅力が出てくるわけです。この歴史文化基本構想ではこのように関連する文化財をグルーピングしながらまちづくり、むらづくりに活かしたらどうだろうということなのです。

私は私で学問的にこれを一応発表して、伊平屋という所は伝承があって屋蔵墓だけが有名だけれども、実際にそれに相応しいようなグスク群がある事実を発表して、皆さんの力になっていきたいと思っています。今度の歴史文化基本構想の『琉球国の兆し』というネーミングも非常に良いんじゃないですか。第二尚氏にも負けないぐらいの宝ものが今回の調査でグッとクローズアップしたということになります。

私は単なる伝承の話をしているわけではありません。具体的にものがあるんです。あとは、こういったものをもっと深く追求していくために発掘調査などやっていくと、今度は具体的にこの時代のものが出てきますので、本当に屋蔵大主が住んでいたのか、発掘をする事でここから、まあ金銀財宝は出ないと思いますが、すごい焼物が出てくるかもしれません。首里城の京の内は首里城では１番の聖域だと言われていましたが、発掘調査してみたら世界で２例しかない焼物が出てきたり、今なら時価４億ぐらいの値が付く焼物が出てきたりしています。時代的には我々の先生方が駐車場を造る前に陶磁器を拾ってあり、時代は間違いないわけです。しかし表面調査をしただけで、まだ下の方の発掘調査はしていないということです。私は西原町に生まれましたが、こんな伊平屋に生まれていたらなあと非常に羨ましく思います。

若い皆さんがこの構想を自分たちの事業の中になんらかの形で取り込めばいいですね。

＜発掘調査の意義＞

上原拓海（総合推進室）：表面だけからモノが出てきている現場で中まで発掘すると、さらに何か出てくるという事ですか。

當眞先生：もっと出てきます。今までは発掘調査をしてモノが出ないとグスクかどうかわからないと言っていたのですが、表面踏査によって土木事業の跡が次から次へ見つかりました。この田名グスクは副村長もいらっしゃいましたが、古い焼物が拾えたし、土木事業の跡があり、現に造ってある。

この辺りは石が相当あり、石垣で積んである。どうも石切り場跡みたいなのがあり、近くから石を取って積み上げた。主体者は誰なのかというのは、島の出身だったのか、それとも外部から来て沖縄本島をうかがうために基地を造ったのかなどは今後の研究であります。そういうのは学問上の話になりますので、現にあるものをどのように活用していくかが皆さんの仕事ではないでしょうか。

前里澄子（教育委員会）：駐車場をもう一度掘り起こすとかいう計画はないですか。

伊礼副村長：その時期が来れば問題ないはずです。

＜ヒバンムイ＞

當眞先生：文化庁という文化財を担当している所管は全部こういったものについて補助金を出しますので、あとは村の体制になります。また、山口さんもちょっと説明していましたが、国が早目にやりたいというのはヒバンムイで、この海域を航行する船を早目に首里王府に知らせるという役割があるんです。江戸時代に入ると日本は鎖国政策を取っています。首里王府はここを通る外国船や日本の船、琉球の船をちゃんと掌握しておかないといけない。ヒバンムイはそのために造られた、今で言えば通信施設です。あの惣絵図の図面にもありますので押さえておこうというのです。

前里澄子（教育委員会）：昔は首里とのつながりがあったわけですよね。

當眞先生：当然です。杣山（官有林）というのはみんな首里王府の土地になります。それから外国船が来る場合に、首里の近辺まで来たら遅いわけです。これをまた島津に報告しないといけないのです。それで、この辺を通る船をいち早く首里城に知らせないといけない。そういう通信網の整備をちゃんとやっているのです。それがこういう遠目番や火立て屋とか、皆連絡しながら行くわけです。これも早目に文化庁としては指定していけたらということです。

伊礼副村長：西銘地区の真ん中に残っている、拝所があるアーガムイという所ですね。

當眞先生：今後は屋蔵墓どころじゃないんじゃないかなと思いますね。あの頃は風葬が普通ですが、後世の人が壺屋焼きの骨壺を買ってきて収骨したと思います。それよりも伝承の地が実際に土木事業の跡があったことが大事です。

MUI 景画 山口：佐敷グスクと上里グスクの類似性、我喜屋集落の変遷について補足追加説明

＜第一尚氏と佐敷＞

當眞先生：第一尚氏は私の元祖と結びつくので手前味噌なのですが、第二尚氏の場合は第一尚氏が統一した国を奪い取っているのです。第一尚氏は元々点在していた地域をまとめたんです。尚巴志の子孫、ルーツについては伊平屋の出身だというが、実際は熊本の八代辺りから来たのではないかという話など非常に話題になっています。むこうに佐敷という城がありまして、むこうの人達が貿易をしていた。これははっきりわかりますね。熊本に高瀬という所があって、そこを港にしながら中国と貿易をしていた。谷川ケンイチさんや折口信夫さんという人たちは佐敷という所が熊本にもあるから、ルーツはあっちなのだという説です。ヤマトンチュが熊本の佐敷周辺に住んでいる、貿易をして栄えていた連中が直接佐敷に来たのではないかというのが、かなりクローズアップされている。いろんな本が出ています。ところで、グスクの造り方は普通だったら首里城みたいに石垣を積むわけですが、佐敷の場合は法面が崩れやすいので石を貼って強化する。それだけではなく遠くから見ると、石貼りだから石垣に見えるわけです。

佐敷グスクが国指定になった理由には、このような城づくりは今のところ沖縄県では佐敷上グスクだけという点もあります。それが伊平屋で見つかったんです。これは本当に石貼りだとすると、折口信夫らが言っている説とは違い、伊平屋の場合は城の造りが全く同じだから非常に接近していると思います。

＜琉球の国づくりとグスク＞

琉球国がまとまったというのは非常に大切です。これは単なる国づくりをしたというだけではなくて、アイヌの人たちとオーバーラップして話をしているのですが、アイヌの人たちも国づくりをお互い同士で争うのです。チャシというのを作って争っている、けれども本州から和人、いわゆる日本人が入り込んで蹴散らしていくんです。鉄を与えたりして内部分裂をさせる。そうして次第に北の方へ追いやられていく。結局国づくりができないわけですが、先住民族といういう視点から話題になっています。琉球の場合は点在しているシマジマが１つになって国づくりをした。これは現代の我々は十分理解をして、きちんと押さえておかないとならないわけです。そういう基になる場所というようなことでは非常に大事じゃないかと思います。

沖縄県内にあるグスクのうち１番高い所にあるのが久米島の宇江城です。これが 308mでしたかね。久米島は 300mの山の上に宇江城はあるのですが、20mぐらい下がった所に集落があったというのがはっきりわかっているのです。だからグスクとの比高差は僅か 20m位なので、伊平屋のグスクは集落が低い位置にあるわけで、全く異質のものです。

日本の歴史を理解する上でも、こんなに小さな島に５カ所のグスクがひしめき合って、高い山にある。なぜこんなふうにグスクを造らないといけないのかということは我々もまだわからないです。こんなに 300m近い所に、人口がいくら増えていたにしても 5,000 名弱でしょう？こんな高い所に作る必要があるのか、何故だろうか。それだけでも、これを聞いたら皆見に行こうとなるが、何せ高いから簡単には行けない。

賀陽山の石垣を仲川長伸さんが見たことがあるから登ってみようということになってグスクの存在がわかりました。

＜鮫川大主とグスク＞
東恩納教育長:伝承ではここに石垣があるよというのはわかっていたらしいが特定できていなかった。

當眞先生：グスクの形がわかっていなかったが、今度はグスクの縄張りがどんな形をしているかがわかったんです。

東恩納教育長：１つ質問していいですか。鮫川大主が佐敷方面に行ったという何か学術的なものがありますか。

伊礼副村長：造り方も一緒ですか。

當眞先生：はい。伊是名グスクの造り方は海に面していて、登って行くと脇がみんな削平段で、そこから道に向かって弓矢が発射できるようになっている。鮫川大主は屋蔵大主の息子で、彼は伊是名に派遣されてイシガネーといって石を金として皆から集めて城づくりをした。けれども伊是名ではまとまらないというので佐敷へ行ってそこで城づくりをしたと言われています。鮫川大主の子供がナーシロのウフヤ、つまり尚思紹、その子供が尚巴志となるわけです。だから城づくりは非常に似ているわけです。
　私は今後の調査研究を進め、第一尚氏は伊平屋から出ているよと言いたいわけです。伊平屋村の皆さんはこれをまちづくりに活かして頑張ってください。

伊礼副村長：今日は初めて参加された方々もいらして前回の繰り返しをやりましたけれども、ご質問とか知らない事などありましたらどうぞ。時間はそんなに取れませんが、どうでしょうか。

＜グスクが多い離島＞
上間平明：先日、商工会青年部の先進地研修で渡嘉敷村に伺いましたが、その時に渡嘉敷村のホームページで村の歴史を見ていると、渡嘉敷と久米島と伊平屋が琉球の年貢の場所であるという表記がありました。これも 2～300 年前だったと思うのです。歴史的なつながり、山があって年貢が取れた、薪が取れた杣山など関連してくる部分があるかなと思います。

伊礼副村長：渡嘉敷もそういうのがあるのでしょうか。

當眞先生：北からはここが琉球の１番の玄関になるわけです。中国からの玄関は先ほど言った久米島などです。だから久米島もグスクが１番集中します。１番島でグスクが多いのが久米島で、次は伊平屋です。だけど国土面積からすれば１番グスクが多いのが伊平屋で、次が久米島です。伊是名で２箇所、伊江島で１箇所ですから、ここはそういう面では沖縄本島と貿易をする場合はここに集中するというのがあったのではないかと思います。

東恩納教育長：水田地帯との関係性もあったのでは。

當眞先生：それもあるでしょうね。当時船を操る場合は米がないといけないから、中継地点で米と水が供給されないといけないから、それで国づくりが始まるわけです。

伊礼副村長：これまで概要をお話ししてもらいましたが、次は少し休憩を入れまして２部には伊平屋村歴史文化基本構想の今後の活用についたまとめができていますので、それについて検討していきます。

－第２部－

＜歴史文化基本構想に関連した総合推進室からの提案＞
伊礼副村長：それでは第２部の議題に移りたいと思います。前回伊平屋村歴史文化基本構想の素案が

出ていて、手元にあるのが概要版です。各部署からの意見について、事務局お願いします。

事務局（嘉手納）：各部署へ協議や擦り合わせが必要な事業を提案するよう呼びかけをし、総合推進室から資料が提出されております。提案内容の説明を推進室よりお願い致します。

上原拓海：事業提案の説明
「伊平屋島の念頭平松と周辺地域資源を生かした観光地形成事業(仮称)」

伊礼副村長：推進室の資料を見てみますと、構想の中の活用と保全の所に該当するのかと思うのですが、どうでしょうか。これは構想に組み込まれているのでしょうか。

＜先行できる事業区＞
MUI 景画 山口：資料説明
念頭平松公園を起点とした杣山地区というのが総合推進室からの提案部分で、この場所は既に念頭平松が国指定になり、田名グスクがあり、杣山があるなど色々な資源に恵まれています。現在、念頭平松公園も改修計画が進んでおり、そこが起点になって利活用が図れるようになります。イチャジチとか馬車道、田名グスク、後岳も杣山の中にありますから、この提案は先行してできる場所として構想でも位置付けています。
琉大の林学の仲間勇栄先生は杣山を相当研究なさっていて、自分は伊平屋に行きたいと言っておられたんです。こういうような事業をやる時に杣山関連の研究者も含めて進められたら良いのではないかと思います。
田名北の『島の成り立ち保存活用区域』についても同様に、動こうと思えば動けると思います。ここは指定されているものが多いです。久葉山やヤヘー岩、洞穴、そしてメランジュがある。全体の歴史文化基本構想を理解する上でも、島の成り立ちのところを手掛けると、そこから理解しやすくなるので今後の活用に向けた取り組みの中では先行事業区として、この２つを位置付けています。

伊礼副村長：今、総合推進室から提案されているものについては、位置付けとしては活用に向けた取り組みの中で拾い上げるということだと思います。たぶん総合推進室がこの事業化に向けて心配しているのは、どういうふうに手を付ければいいかということかと思いますが、委員の皆さん、どうでしょうか。例えば、馬車道があるというのであれば、その道を人が通れるぐらいにするとか、現状といいますか復元的なものをやるとなると木の伐採などということが出てくると思います。

＜事業化に向けた取り組みと一括交付金＞
MUI 景画 山口：先ほどの提案では最初の段階で調査に入って、30 年度にルートの話などが出てくると思います。やはり 29 年度に資源調査をきちんとやって、守るべき所、活かすべき所を取りまとめた上で、整備に向けた検討が次の段階で入るという事でしょうね。

伊礼副村長：国とのやり取りの中で、この３カ年の事業内容を計画書の中に書かないといけないという状況が出てくると思います。そのために、成果はどれですかということであるかと思います。当然、調査をして現場の確認もしながら、次にどんなふうに利活用できる状態にするかということの中で今言った話が出るとは思います。

MUI 景画 山口：引き続いて當眞先生や仲間勇栄先生等の専門家の指導を受けながら調査を進めていかれたら良いと思います。田名グスクは今までの上り口と、そうではなくて石切り場の方があるというような話とか、後岳側の調査も當眞先生に見て頂きたい所もあるでしょうし今までやったのは構想で、おおよその考え方というか方向性が見えてきただけです。実際に活用に向けた調査というのは、もう少し詳細な調査になろうかと思います。

伊礼副村長：それを提案はしていますけれども、そういった事業化をしていいのかどうかという事も

含めてだと思います。この保全と活用の章でこういうふうに関連付けしていますけれども、それが整った次の段階で事業を再度構築するのか、という話になると思います。皆さん、どうでしょうか。

當眞先生：歴史文化基本構想を受けてどういう事業を進めていくかというのも大きな課題で、一括交付金がある間にというのもあります。観光地というと、すぐに道を造りましょうというふうに拙速に土地をいじるという事が今まではよく行政でありますね。ソフトというのはそういう面で非常に難しい面もあるけれども、ハードになると土木事業をやればいいだけの話なんです。１番気を付けないといけないのは、予算があるから大きな馬車道を造りましょうとかにいきそうなので、その辺は今一度考えないといけないでしょうね。

＜充実すべき対象地の調査とアイディア作り＞

さしあたっては調査し、どう活かすかというアイディア作りみたいなものもできます。それと同時に、一括交付金というのは土地買い上げもできます。知念辺りではやっています。ただ、この前も知念の斎場御嶽で問題になった事は、前に駐車場があった所は本来儀式を行った場所だから元に戻そうとしているのに別の課が公園の青写真を委員会に持ってきたものだからびっくりしました。つまり四阿を造るとか駐車場を更に整備するとか、ハード面はお金も使いやすいわけです。

イチャジチやタンメー石まで行かせるというのも良い事だけれども、歴史文化基本構想では念頭平松を中心にしてこの一帯をグルーピングでやっています。この一帯をどのように活かすかについて、当面やるものは標識もあるし、標識も日本語だけではなく英語もやるとか、ゆっくり知恵を出していくのがいいのではないかと思います。そうすると、一括交付金が切れたらどうするかという話になるから、その辺が恐らく今後の課題なのでしょう。教育委員会がこの中で細かく触れるのはできないんじゃないですかね。だからこれを広く各課に浸透できるようにして、各課で一生懸命考える。その代わり、すぐ開発、道づくり、建物づくりというような安易な考えはしない方がいいという事だけは触れていかないといけないんじゃないかと思います。

今、提案されているものでも、馬車道を復元してイチャジチやタンメー石も見られるようにするというのはよくわかりますが、そうすると恐らくこれは杣山に再度車道を通すとどうなるかとか、色々その道の専門の先生方から疑問の意見を言われると思います。

上原拓海：あくまでもルートを発見した際に、今後どう展開していくかという資料の段階です。

MUI 景画 山口：馬車道があったとされる林分境界の線、ウッカーグスクに向かって３本の線。ウッカーグスクから後岳に登って行くライン、ウッカーグスクからガジナの方に下りてくるライン、林班の境界線が道だっただろうと考えられます。こういう道を歩きながら、この道の所にいろんな仕掛けがあるだろうという視点から、まず現地踏査を実施することが必要です。

當眞先生：そういう調査を先行するというのは大事ですよ。そうすればまた登山道として標識をそのように整備すればいいわけです。だから調査を先行するというようなのがいいでしょうね。ただ、一括交付金も期限が決まっているんです。八重瀬町では一括交付金で土地も買って、そこにガイダンス施設を整備しようとした計画を立てました。検討委員会ではその案は港川人が出てきた岩山に接近して問題になりました。もうちょっと広い視野で考えて、駐車場やガイダンス施設を岩山から離して港川の漁港の魚売り場や食堂も含めて広い計画でやった方がいいという話をしました。役所内部の横の連携ができていなかったんです。伊平屋村の場合は副村長が委員長をなされているからいいと思いますが、横の連携を密にしてやらないといけないでしょうね。開発部局はすぐ何か造ればいいという感じになるから、その辺は調整しないといけないです。

田名グスクも県指定に躊躇する委員もいらっしゃいます。何故かというと、皆さんはすぐ整備といって木を伐開して石垣を積み直した整備をやる。今後は希少動物・植物を守りながらグスクまでの進

入や活用について皆の知恵を出しながら考えていくことですと私は審議会でも説明しました。その辺さえ気を付ければ大丈夫だと思います。
　今回は構想だからここは書ききれないわけでしょう。そういうふうに細かくはやらない。今出しているのは調査研究をまず先行しましょうということですよね。

＜指定に向けた取り組み＞
　それから、こう書けませんか？さっきヒバンムイの指定の話をしていましたが、教育委員会が早目に指定する必要があるとか、あるいは国指定を目指すなど、こういうのは出せるわけでしょう。

MUI 景画 山口：指定に向けた取り組みという項目で入れています。

當眞先生：それでいいと思います。他のものも入れる必要があれば入れてもいいと思います。あまり入れすぎると教育委員会が大変になりますから我々からあまり強硬には言えないけれど、できればやはり教育委員会はやるべき仕事、また他の部局はこういうのを頑張ってほしいと、きちんと入れていた方がいいです。

MUI 景画 山口：指定に向けた取り組みの中にヒバンムイのネットワークで３箇所、建築で灯台、天然記念物でメランジュというふうに入れています。これは先行して指定に向けた取り組みをして保存する。上里遺跡など指定をやりたい所はいっぱいありますが、まずは調査の所に入れています。

當眞先生：よろしいんじゃないでしょうか。

伊礼副村長：先程の指定に向けた取り組みの中のヤヘーの近く、というのは田名北西ですよね。

MUI 景画 山口：北東というのは間違いです、申し訳ございません。

東恩納教育長：岩石群、鉱物資源が色々ある所はヤヘー側になるわけですね。

＜多言語標識＞
當眞先生：標識なども具体的に出せますか。やはり標識は重要で、最近は英語をはじめ３～４か国語ぐらいで書いた標識が多くなりました。

東恩納教育長：歴史文化基本構想を踏まえて観光資源の活用と並行したら総合推進室辺りがすぐ動けます。

＜教育委員会の調査等に向けた対応＞
　グスクの発見等の関連性で、教育委員会の仕事は先ほど當眞先生がおっしゃった通り私共は一貫しているわけです。何年間かのスパンで計画的に進めていくという考え方を委員長が頑張って示しつつあるんですが、まだ確定していない。ただ、これだけの多様なものが皆さん方のおかげで出されているし、何から先にやればいいのかを教育委員会は整理して、継続して調査を進めていきたいと思います。

當眞先生：村単独では大変です。補助金メニューがあるのは村が 20%は持たないといけないですから、全てできるわけがないですから、できるものは早目にやられた方がいいです。

東恩納教育長：調査の方針も教育委員会は徹底的にやらないといけないですね。例えば、トレイルランの件がありますが毎年コースが変わるのですか。

上原拓海：基本的には毎年コースを変えるというのでやっています。

東恩納教育長：文化財めぐりなどの意味合いも入っていますよね。

上原拓海：そこにグスクがあったというのはわからなかったので、そういった関連性で歴史の道を走るとか、腰岳グスクルート等は今後展開していきたいと考えています。

當眞先生：そういう中でリーフレットを作ったり、これも一括交付金で取れるんじゃないですか。できないですか？１つの事業の中にパッケージみたいに入れ込んでやればいいですね。知恵をどう出すかですね。基本構想の中に細かくは書けませんからね。

伊礼副村長：継続して調査というのはどうにかして進めた方がいいと思いますね。

當眞先生：国指定にする場合でも、例えば佐敷グスクも 20%は市が持って、文化庁から補助金をもらって５年ぐらい調査しています。国はすぐには国指定しないです。読谷も土地は区画整理区域から除外してキープされており、国指定する前に検討委員会を発足させて国指定に値するか学術的な面も含めて調査研究を進めるという事です。補助メニューがあっても人員がなければどうしようもないということになります。

伊礼副村長：この件に関してはずっと言っている話ですが、伊平屋村が弱かったところです。これだけの事がわかってきたのですから予算的なものもあるでしょうが、ぜひ途切れる事なく継続してやりたいという感じがします。検討委員会やチェック機能の働く体制はやっておかないといけないと思います。

東恩納教育長：専門的な方の力を借りて、動きやすい形で、私はしばらくは連絡調整程度でいいのではないかと思いますが、島はね。

＜強く推すべき伊平屋のカラー＞
當眞先生：『琉球国の兆し』は強く推した方がいいですよ。伊是名に負けてはいかん。西原も尚円王の内間御殿を中心にしようとするのだが、この前の委員会で、尚円王が 15 年いたというだけでこんなに尚円王を推していいのか、と委員から色々意見が出ていました。委員は琉大の先生とか文化財課の課長も入っていますが、何故彼が 15 年ここにいただけで王様になり得たのか、土地の魅力でしょう、それを出そうと。それが非常に大事なんです。今は英雄主義みたいなんです。伊平屋は伊平屋のカラーでやることが大事。それは第二尚氏じゃない、琉球国の基だ、というのを誇りに持ってやればいいと思います。

MUI 景画 山口：伊平屋村のアイデンティティーにつながりますね。

當眞先生：今後もつながるようにしないといけないです。いつもクシジー（後地）と言われているから。

伊礼副村長：日本全国そんな感じがします。本州を中心にしている。

當眞先生：今帰仁などは非常に独特です。今帰仁を中心にして沖縄地図を描いたりしている。皆さんは伊平屋を中心にした沖縄地図を描いて出してみたらいいですよ。

伊礼副村長:山口さんの出した前泊湾を前にした地図の書き方などからすると、全然見方が違います。

當眞先生：歴史文化基本構想というのは、そういう題材をきちんと構想としてまとめましょうというのが作業ですから、それをいかにして料理していくかというのが大きな課題です。
　西原町の歴史文化基本構想は今年で終わりましたが、委員会ではもうちょっとテーマになるようなことがあるのではないかとの意見がありました。しかし、内間御殿が国指定になったのでよかったと思います。

＜ビレッジトレイル等への反映＞
伊礼副村長：では、時間も迫っていますが、推進室から提案しているものについては、調査をしてこれが適当かどうか、どの辺でやったらいいのかというのは教育委員会作業と詰めながらやるということでいいんでしょうか。ビレッジトレイルは基本的には今ある状態の中を走るのが普通だそうです。

きれいに道を造ったりするのはないらしいです。ですからルートの確認をしてサイン、看板を付けるかどうかの検討もあります。

當眞先生：リーフレットなども出すんでしょう。今もらっていますが、ここにルート図まで出してあってこれでいいのだが、グスクの写真などがあれば歴史の好きな方々も多いからとても良いと思います。

上原拓海：舗装されていない道路を走るというのが基本的なものです。看板ぐらいは出して、なかなか道がわからないという事でリーフレットとかで、写真を付けてやればそれを見ながら走れるかなと思います。

伊礼副村長:人が入っていくと植物の貴重種盗伐などがあるので､その辺は慎重に調整していきます。

當眞先生：生物の先生たちはそれを１番心配している。

東恩納教育長：それもあるけれども先般NHKでグスクの放送をやってから結構反響があるんです。登ってみたいとか走ってみたいとか、自由に行っていいのかとかあります。そういう事が増えてくる危険性もあります。夏場はハブが出ますとキャンペーンすれば済みますが、こういうのが好きな人は関係ないんです。

伊礼副村長：ルートを造ってやると簡単に拡散していくものです。総合推進室は今言ったことを念頭に入れて、教育委員会と十分詰めながらこれは進めていいということで確認をしたいと思います。総合推進室の提案でそこに手を付けるなら、先ほど仲間勇栄先生の話が出たのでその辺の話も関わりとして、委員会をやるのであればそういったつながりも何か持っていた方がいいかもしれないですね。

當眞先生：先生方の意見を積極的に使うのは良いと思います。

伊礼副村長：仲間先生は一昨年に農業関係でお呼びしてやりました。

東恩納教育長：そういう人材を紹介してもらえたらいいです。

伊礼副村長：そういうネットワークは作っておいた方がいいです。
　では先程のものを確認して基本構想素案という事にしたいと思います。それでは第４回委員会を閉じてよろしいでしょうか。
　村長への提案は教育長から進める予定でいます。

當眞先生：ダイジェスト版も計画していますか。

伊礼副村長：概要版はぜひ作って頂きたい。今までの分厚いもの（本編）をずっとやるわけにはいかないですから、今まで全部作らせてはいるんです。説明会に使ったりしています。

當眞先生：西原町の教育長さんはもう町長さんになられましたが、概要版を作らないといつも議会答弁で大変だったと言っています。こういうのがあればグルーピングしてちゃんと全体として利活用しましょうと説明できます。教育長さんが１番喜んでいるのではないですか。

東恩納教育長：今回提示された概要版はコンパクトにまとめられているからわかりやすいです。

伊礼副村長：概要版があれば各区長もやりやすいはずです。今、宿泊や観光客が多くなってきて、やっぱり１人旅や歴史とかそういったものに皆さん興味を持っています。

事務局（嘉手納）:そのようにまとめて進めたいと思います。それでは最終の委員会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

伊 平 屋 村 歴 史 文 化 基 本 構 想

報　告　書

発行年月日	平成 29 年（2017 年）3 月
発　　行	沖縄県伊平屋村 教育委員会 沖縄県伊平屋村字我喜屋 251 ℡ 0980-46-2001
調査・監修	有限会社 MUＩ景画 沖縄県沖縄市与儀 1-34-32 ℡ 098-933-2414